

古今集奥書集成から見えるもの

浅田 徹

はじめに

国文学研究資料館（旧・文献資料部）は、平成十年から十四年にかけて、館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成を試みた。これは毎年リサーチ・アシスタント一名を付けて、国文研が当時所蔵していた古今集のマイクロをすべて調査し、その奥書の全文を省略なく書き出して、人名や年号で検索できるようにしたものである。最初の三年間は、当時国文研の教員であった浅田が監修をしたが、最後は浅田が館を離れたため、小川剛生氏が引き継いで完成させて下さった。その成果は国文研の『調査研究報告』に掲載されている。

・小川剛生・佐藤裕子「同（四） 附、古今集注釈書の奥書―『毘沙門堂本古今集注』関連を中心に―」（『調査研究報告』23、平14・11）

少なくとも浅田が担当していた間のデータ作成は、当時のRAの山本氏・岡崎氏・五月女氏の労働によるものである。従って、浅田の名前の入った業績ではあるが、小川氏・佐藤氏ほか右のメンバー仕事であって、浅田は方針を決め、時々作業に助言した程度のこととお考え頂きたい。本稿では、このデータからわかることの一端を述べようと思う。

この奥書集成では、二百二十七本の写本をマイクロで、またやはり館蔵の複製・影印・翻刻などで二十一本、合計二百四十八本の奥書を調査した。そもそも奥書がなかった本もそのうち四十六本あり、またごく僅かながら同じ本の重複もあるが、これは間違いなくこれまで行われた古今集の奥書調査のうち、飛び抜けて大規模なものである。ちなみに『国書総目録』は古今集の写本として、断簡を含めて二百五十四本を掲げている（当然ながら、国文研の調査とは相互に重ならないものも多い）。その数字と比較し

・浅田・山本まり子「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（一）」（『調査研究報告』20、平11・6）

・浅田・岡崎真紀子「同（二） 付：西下経一の古今集伝本研究について」（『調査研究報告』21、平12・9）

・浅田・五月女雅志「同（三）」（『調査研究報告』22、平13・11）

ても、国文研の奥書集成は、データの網羅性において一応の評価に堪える水準にあると考える。

一、古今集に奥書を付すこと

さて、古典文学の写本に書写時の奥書が付いていることは珍しくないが、作品によって奥書が付き易いものと、そうでないものがある。経典のようなものを除いた和文の文学作品で、最も豊富な奥書が採取できるのは、間違いなく古今集であろう。国文研の奥書集成は、前述の通り二百四十八本の古今集写本を調査しているが、そのうち、奥書を持つものは二百二本で、全体の八割という高率に上る。

では、なぜそのように高い率を示すのかと言うと、古今集は和歌を詠む人間の必須の典籍であつたのみならず、伝授の対象になっていたからである。古今伝授では、その始発期に当たる平安時代から、「証本の授与」ということが重要な要素として組み込まれていた。¹

古今集奥書は、伝授と関わって、次のような機能を持っていた。

【A】「証本宣言」

(1) 本文の由来の權威を強調する。この本文は「師説」によって書いたとか、代々受け継がれた「家本」を写したものだとか称する。

(2) 書写の厳密さを強調する。親本から「一字も違へず」写したとか、「透写」したとか、あるいは写した後「数度校合」を加えた等と称する。

【B】「授与証明」

この本は宗匠某が弟子何某に「伝」へたとか、「附属」したとか巻末に明記し、署名・花押等を加えて、証明状の役割を果たす。

こうした機能は、当然ながら漢籍・仏典の奥書のそれを踏襲したものである。和文作品でこの種の奥書が付されたのはまずは古今集で、後には伊勢物語と源氏物語がこれに追隨した。²

実例で見よう。国文研の奥書集成のうち、第三稿に掲げられているものである（一部、翻刻を訂正した）。

古今一三五

所蔵者 陽明文庫

所蔵者整理番号ナシ 写一帖

資料館マイクロフィルム番号五五―五四九―一 紙焼写真ナシ

伝称筆者 近衛基熙

(巻末)

A 此集家々所稱雖説々多且任師説又加丁

見為備後学之証本不顧老眼之不堪手

自書之

近代僻案之好士以書生之失錯稱有職

之秘事可謂道之魔性不可用之但如此

用捨只可隨其身之所好不可存自他之差

別志同者可隨之

A・藤原定家

貞応二年七月廿二日 癸亥 戸部尚書藤判

同廿八日説合訖書入落字了

伝子嫡孫可為将来之証本

* 1223年。

* 嫡孫…為氏

B 以家本不違和漢文字仕并

行分等連々書写校合畢但於

仮名序初五枚者先人御自筆也彼

強行分等不被守正本之間雖隨

其自春上不違一字至行分以下

落字等皆以如本書之正本細々

披見之条不可然之間如此慇懃

染筆了曾不相違家本者也

文保二年四月十三日 羽林中郎將藤判

* 1318年。

C 此集以逍遙院内府自筆本後十輪院

内府所書也為証本間可寫置之旨

天和年中辱蒙 後西院仰以写之

但真名并行分等如本書之於仮名

者強而不守本殊急々令書写之条

其舛狼藉至極也仍不顧老眼不堪

再写之以授与左幕下只是欲備

後代証本而已

C・近衛基熙

* 逍遙院内府…三条西実隆

* 後十輪院内府…中院通村

* 左幕下…近衛家久（基熙孫）

宝永三年十二月廿一日（花押）

* 1707年。

右は陽明文庫蔵の本で、近衛基熙の書写した本である。最初の「古今一三五」はこの集成で一本一本の古今集に付けた通し番号で、その奥書が何回かにわたって書き継がれている場合には、その分だけ奥書を分割して「A」「B」などと記号を付している。奥書を分割したのは、索引の便宜のためである。

順に見てみよう。奥書Aは藤原定家が貞応二年に証本に付した奥書で、古今集の奥書の中でも最も著名なもの。定家が、この本は自分が「師説」に基づき、「証本」として定めたものだと言ひし、「嫡孫」すなわち為氏に授与すると証明している。

奥書Bは定家の子孫為定が、この本は「家本」を正確に写したものと証明している。同じ親本から亡父（先人）為道が仮名序の冒頭だけを写して中絶していたものを、最後まで完成させたのである。

奥書Cでは近衛基熙が、三条西実—中院通村と写し継がれた本を正確に写したと言ひし、「左幕下」すなわち近衛家久（基熙孫）に証本として授与すると証明している。鎌倉時代初期の藤原定家から、鎌倉末期の為定、室町時代後期の実や江戸初期の中院通村、そして江戸中期に入る頃の近衛基熙に至るまで、古今集の正しい本文の授与が続けられてきたことが、延々と続く奥書の堆積によって示されているわけである。

我々和歌の研究者は、古今集の写本を見るとき、とりあえず巻末の奥書

がどうなっているかをまずはメモするものだ。それがその本のいわば履歴を示す重要情報だからである。

さて、二条為定による奥書Bをもう一度見ると、最初の波線部に「和漢の文字仕並びに行分け等を違へず」写したとある。漢字の宛て方を原本通りにして、行を改行するところも全く同じにしたということである。こういう時は、頁の変わり目も一致させているものと見なしてよい。さらに、父為道は仮名序の最初を写すのに、証本の改行を守らなかったたので、仮名序だけはそれに倣ったが、その次の春上以後はすべて証本通りにしたとあり、「一字も違へず、行分け以下落字に至るまで」本の如く書いたと説明している。「一字も違へず」とは、ひらがなの部分を写すときに、ある音節に対する変体仮名の選択「な」なら、「那」の崩しを使うか、「奈」を使うかといったこと」までその通りに写すことを言う。「落字」を本の如く書くとは、証本で書き落として傍らに補入してあるような部分までも、その通りの形態で写したの意である。

すなわち、為定はここで、証本の頁を、そのままコピーのように写し取る書写を意図したということになる。それは、いま写している本に対して、証本と全く同じ価値を付与して使用するためである。

奥書Cで親本になっているのは三条西実隆—中院通村と写し継がれた本で（為定と実隆の間の過程は不明）、貴重な本なので後西院が基熙に命じて複本を作らせたのだが、その時は漢字・仮名の区別と、改行の点までは保存して写したが、時間的余裕がなかったので変体仮名の使い分けまでは保存できなかったという。そのため、約二十五年を経た今回は、厳格に書写

したのだと記している。基熙がこういう書写を心掛けたのは、この本に奥書として明示されてはいないものの、実隆や通村も変体仮名の使い分けや改行点が正確に写し継がれてきたと考えたからに違いない。

BやCでは証本としての権威が、単に誤写がないというだけでなく、原本の細部の形状まで写し取ることで一層高められるという考え方が見て取れる。陽明文庫にあるこの写本は、そのような観念の連鎖によって、何百年にもわたって写し継がれてきたものである。

原本を全くその通りに写すという、緊張感や集中力を伴う作業を支えていたのは、一方ではそのような正確さを付与された写本を受け取ることが、所持者の権威を高めるからであり、受け取る側の欲求に応える行為であった。しかしそれだけではなく、そうした特殊な作業そのものが、古典というものを次の代へ渡していくための神聖な労働と感じられていたのであるうと想像される。右の奥書群には、そうした労働に従事することに対する矜持のようなものが感じられよう。

二、古今集奥書の推移

さて、国文研の奥書集成データの特徴は、無差別性ということにある。もちろん尊経閣文庫や陽明文庫などに蔵する名高い古写本も調査されているが、必ずしもそうした貴重本でない古今集写本であっても、調査先の文庫にあれば、国文研は差別なくマイクロ収集の対象にしてきたのである。それによって、国文研は現存する古今集写本について、偏りの少ないサンブルデータを持っていると言えよう。

いま、奥書集成の完結時に、小川氏・佐藤氏によって作成された年次の索引を用い、これらの奥書の年次別分布を百年刻みの表にしてみた。

	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	年代	総数	うち、書写以外の奥書類	差引
	1801 } 1868	1701 } 1800	1601 } 1700	1501 } 1600	1401 } 1500	1301 } 1400	1201 } 1300	1101 } 1200	1100 以前		1	(*最古の奥書：長元八年)	1
	15	23	33	29	31	40	36	8		(*古今伝授の開始：12世紀後半)			8
	校合 2 買得 2 献上 1	校合 2 買得 1 改裝 1	伝領 1 真筆証明 17 (極書・極札 14)	授与 1 真筆証明 11	校合 1 真筆証明 2 伝授 1 加点 1 伝領 1	校合 3 伝授 5 伝領 1 買得 1	伝領 1						35
	10	6	15	17	24	30							

計 216 (明治以後を除く)

ここで拾ったのは、奥書類のうち、「書写」「校合」「授与」「伝領」「買得」「筆跡鑑定」などを示すものである。データの取り方について少し説明する。

・年次を記すもののみに限定した。従って、例えば極札の多くはカウン
トされていない。

・某日書写、翌日校合というような場合は、一連の行為として一つに数
える。

・数値は奥書の異なり数を示している (例えば、定家貞応二年奥書が何十個
あっても、1と数える)。

このようにして数え上げた奥書の総数は二百十六個であった。

この表を見ると、延喜五年 (905) に古今集が成立して以来、最初の一世
紀には奥書そのものが付かなかったのが、古今伝授が始まる十二世紀から
奥書が付き始め、江戸時代になるとやや数が減ってくる、というように見
えるだろう。前半はそれでよいのだが、後半は補正が必要である。ちよつ
と考えればわかるが、現存している古典籍の写本は、江戸時代のものが大
半である。従って、総体としての書写行為の数という分母がどんどん増え
ていつているわけだから、この数字の推移は、室町から江戸に掛けて、書
写行為は増えて写本も増えているのに、その行為を示す新たな奥書が、急
激に記されなくなっていくことを示していると読まなくてはならないので
ある。残念ながら、この奥書集成はマイクロフィルムを資料にしている関
係上、写本の書写年代は判定していない。そのため、年代による写本その
ものの数の比率は示せないが、常識的に言って、今述べたようなことは認
められて良いと思う。

さらに、これらの奥書のうち、書写を示す奥書はどの程度あるかを考え
てみよう。というのは、この二百十六個の奥書データには、右表の四段目

に書いたように、「校合したのみ」とか「伝領しただけ」というような奥書が含まれているからだ。その数を見ると、梓の④くらいまでは目立たないものの、⑥の十六世紀になると、「真筆証明」が急激に増え、それは⑦の江戸時代に入ると、古筆家による極札や極書といった形態を取って増えていくことがわかる。

いま、それらを取り除いた数を表の最下段「差引」の段に示してみた。つまりこれらが書写行為に付随する奥書数である。これを見ると、百年刻みの傾向は非常に明瞭になるのではないだろうか。鎌倉・南北朝期を頂点にして、次第に数字が減っていく。実際には書写行為全体の分母がどんどん増えているのだから、古今集書写に際して書写者みずからの奥書を付す習慣は、中世後期から減少傾向にあり、江戸時代には衰退してしまった、と結論すべきだろう。

さて、以上のことから何が見えてくるだろうか。

古今集は当初、奥書などを付ける典籍ではなかった。そもそも和文作品の写本には、奥書などを付ける習慣も発想もなかったのである。ところが、平安末期に古今伝授が始まり、古今集証本の価値が高められると、貴重な古今集を写し伝えること自体の文化的価値が強意識されるようになった。歌壇の中核にある歌人たちは、次々に「証本宣言」や「授与証明」の奥書を、文書のように発行（発給？）するようになる。それを写し継いでいく者たちも、いわば本文の血統書を付けるように、先行する奥書を新しい本に転載し、かつ自分が責任をもってそれを写し、正しい形で次の世代へ渡したという奥書を加えていったのである。

しかし、室町時代から、状況が変わっていく。それにはいろいろな要因があったと思われる、一つの原因に還元するのは恐らく正しくない。例えば、そもそも定家奥書を持つ古今集写本が諸方面に流布して、珍しくなくなっただけということも無視できないだろう。室町時代には、定家本系統でない古今集は既にほとんど流布していなかったのは、和歌の研究者ならばよく知っていることである。すると伝授においても、本文自体についてその權威を主張することの意義が薄れていくことは当然考えられよう。ある意味では、定家本古今集の本文は、歌人たちの公共財になっていったのだとも言えるかもしれない。同時に、古今伝授の方法も、「証本の授与」から「秘伝書の授与」へ変化して行く。いわゆる切紙伝授への移行である。

そもそも古今伝授は、単に和歌の穏当な解釈を教えるだけには留まらず、教訓的な意義や神秘的な象徴などを、伝授を支える秘義として付加して講釈する傾向が早くからあった。そうした秘義が独立していった結果、切紙が成立すると巨視的には捉えることができるが、古今集証本自体の權威の希薄化と、切紙の充実ということは関連しあっているように感じられてならない。

全く別の角度から考えることもできる。それは写本自体の商品化という現象である。中世後期になると、伝授を受けるかどうかといったことに関わりなく、有名人の筆であれば喜んでお金を払うという風潮が生じる。その結果、古い名筆に真筆証明を付けてもらって商品価値を高めるという習慣ができて、そのための奥書が室町後期に増えてくるのである。表の⑥で「真筆証明」という類が急が増えているのを見て頂きたい。江戸時代には

いると、古筆家の成立と共に、これらは極札とか極書という形を取るようになる。

有名人が商品として新たに歌書を染筆してやるようなことも増える。三条西実隆の日記にはしばしば依頼に応じて書写している記事があるが、この種の仕事は、窮乏する貴族の副収入として無視できなかったのである。こうした用途の写本では一般に新たな奥書は付けないものだと思う。奥書を付けて何かを証明してやる意味がないからである。江戸時代の嫁入り本などに書写奥書が付かないのと同じだと思えばよいだろう。

さらに江戸時代には、大きな衝撃が襲う。古今集が版本として次々に出版されたことである。川上新一郎氏の研究に拠れば、古今集の版本で最も早く出たのは、本阿弥光悦の筆によるものと称される「伝嵯峨本」であるようだが、同本は定家の貞応二年奥書を有している。それなりの権威を持った本が、印刷という、誤写の生じようがない方法で大量に流布するようになったことの効果は、現代人の想像を超えるのではないか。古今集の版本として最も広く流布した正保版本二十一代集本（この古今集の本文を継承している版本は非常に多い）は、奥書こそ持たないが、右の「伝嵯峨本」を基にして作られた本文であることがやはり川上氏によって指摘されている。貞応二年本という、最も権威ある証本の本文が、大量生産され、市販されたのである。

版本の流布は、証本を苦勞して正確に写すという行為の価値を、著しく低落させたに違いない。もちろん必要に迫られて書写はするであろうが、その行為の価値が希薄化すれば、取り立てて書写奥書を付ける意味が失わ

れていくことは当然考えられよう。

室町期以降の、古今集における書写奥書の減少には、まだ他にも原因が考えられるに違いない。しかし、それらを一つ一つあげつらうよりも大事なのは、麗々しく奥書が付けられることの方が和文作品の書写においては異常だったのだ、ということを確認することではないだろうか。重い権威を付与された作品があり、その由緒ある（と称する）本文を一つの家が独占して、容易に一般の人に見せず、特別な儀式を経て初めて頒布するというシステムは、いずれ本文の希少性が薄らいだり、当該の家の勢力が弱まったりすれば（二条家は室町時代に入って断絶してしまう）、機能しなくなっていくのが当然である。古今集書写奥書の数的推移からまず読み取られるべきなのはその点であると考ええる。

三、江戸時代の古今集書写に関する補足

江戸時代の伝授とそれに伴う古今集書写については、少し補足したいことがある。まず、国文研の集成から、江戸時代中期の地下を代表する和歌宗匠である平間長雅の相伝奥書を掲げておこう（「集成（四）」より、誤記を訂正して掲げる）。

古今二一五

所蔵者 鎌田共済会図書館

所蔵者整理番号 八二・七六二 写一冊

資料館マイクロフィルム番号 三三二一七一一 紙焼写真ナシ

(巻末)

右古今和詞集素本者法印玄旨

明心居士狭々野屋翁の々相承之秘本

不違一字説曲清濁句頭并仮名序真

名序之秘点迄不残書写之令付与訖

於此道尤雖為無極大切之書感厚心篤

実以今相伝之者也如誓盟全不可

有他見漏脱者乎

風觀窓

元禄五壬申天初稗吉辰 長雅

三宅氏

吉文丈

【方印】(二感/生志) 【鼎印】(二良/淳)

長雅は細川幽斎から松永貞徳、望月長孝と続く歌道伝授の系譜を引いており、夥しい秘伝書を作つて弟子に授けていた。古今伝授はその核を成すもので、自筆の奥書を持つ秘伝書が宮内庁書陵部等に多く残っている。右の「古今二一五」本の奥書は長雅自筆と見られるが、彼の伝書の奥書の多くと同じく、「法印玄旨」(幽斎) — 「明心居士」(貞徳) — 「狭々野屋翁」(長孝) という相伝の系譜を強調し、この本はその「相承之秘本」によって厳密に写したものであると称している。他見漏脱を禁ずるなど親本の權威が押し出され、いかにも古今伝授に際しての証本授与奥書の典型と感じ

平間長雅

*法印玄旨：細川幽斎

*明心居士：松永貞徳

*狭々野屋翁：望月長孝

*風觀窓：長雅ノ号

*元禄五：1692年。

*吉文：吉之トモヨメル

させるものと言えよう。

ところが、実は長雅の奥書を付した古今集写本(秘伝書でなく)は、右の一本しか管見に入らない。日下幸男氏による詳細極まる長雅年譜にも、古今集の奥書は一つも拾われていないので、あなたがち私の知見の狭さにのみよるわけでもないのではないか。それだけではなく、国文研の奥書集成による限り、長雅の跡を継いだ有賀長伯や、それ以後の歴代(長因—長収—長基)、またこの門流に連なる人々の奥書も見出せないのである。

そもそも、幽斎奥書を持つ古今集はいくつかあるが、貞徳奥書を持つものは管見に入らない。貞徳は古今伝授を正式には受けられなかったと言われているのである。いったい、長雅の言う古今集「相承之秘本」は本当に存在し得たのであろうか。大いに疑わなくてはならないと思う。

しかし、問題は長雅が嘘をついているかどうかといった小さなことに実は留まらない。長雅が古今集証本を授与した例がこの一つしか見出せないこと、またこの流れの人々が誰も証本授与の奥書を書いていないのではないのかと思われることを述べたが、国文研の集成では、長雅の同時代に地下の和歌宗匠として權威を二分した香川宣阿の奥書なども見出せないのである。

江戸時代に和歌の世界はたいへん大きく拡大した。そのとき重要な役割を果たしたのがこれら堂上系地下の和歌宗匠たちだったのであるが、要するに彼らは伝授において、古今集証本の授与を行わなくなってしまったと想定するしかないのである。

ここで、寛政期に平安四天王の一人として名声のあった澄月(武者小路実

岳門人」の弟子、香川景柄（黄中と号す。初名松田新蔵、香川景平の養子となつて香川家を嗣ぐ。景樹の養父）が門弟に語つたものの聞書を引こう。「香川景柄師口授」と題する写本（大阪市立大学総合情報センター森文庫蔵「911・104 K A G」本）で、表紙に「寛政二年庚戌四月 平惟良」と年次と筆録者を注記しており、その記載は信じてよいであろう。その冒頭の条に、次のようにある（国文学研究資料館のマイクロフィルムにより、句読点・濁点を付す）。

△古今集ノ講釈ハ、伝授シタル者トテモ、地下ニテハ先ツセヌガヨキ也。堂上方トテモ、ナサル、御方ハナシ。仙洞様、又ハ御宗匠ノ御方ハナサル、ト也。柄師。

寛政二年¹⁷⁹⁰時点では地下の古今集講釈は行われていなかったことを語る資料である。堂上でも、「仙洞様」（この時点では後桜町院）か「御宗匠ノ御方」以外に行わないとある。近年研究が進められている御所伝授史の知見によれば、宮廷では天皇家が伝授の管理を厳格化し、宗匠として活動できる公家を厳しく制限したのであるが、そのような体制下では、地下にあつても古今集の講釈は遠慮されざるを得なかつたのではなかつたか。江戸後期の地下の伝書を見ると、少なくとも有賀長伯以降の貞徳流においては、詠歌大本秘訣（三巻。詠歌のあるべき姿・態度を示すもの）と春樹頭秘抄（または春樹頭秘増抄。テニハの秘伝）を相伝されれば宗匠として活動することができたように思われる。「古今伝授」は既に実体を失っていたのである。長雅以後、古今集証本の授与奥書が見出されなくなることは、その顕れだったと考えるべきだと思う。

ちなみに、証本が授与されなくなつた後、地下の歌人達はどうやって古

今集を研究したのかと言へば、それは基本的には版本によつたのだと考えられる。秘伝書（切紙的なもの）は写本で伝えられていくが、本文は版本によつて享受される、という棲み分けが発達していったのではないだろうか。以上、大変駆け足ではあるが、奥書集成から見えてくる古今集書写の歴史の変遷について概観した。なるべく巨視的なところから問題を捉えようとしたので、粗い叙述が多くなっていることをお断りする。

注

（1）初期の古今伝授が「証本の授与」を第一義にしていたと考えられることについては、拙稿「教長古今集注と始発期古今伝授の問題」（和歌文学研究77、平10・12）参照。

（2）歌道家や伝授の発生と軌を一にして、証本書写が厳密さを強調するようになることについては、拙稿「「不違一字」的書写態度について」（井上宗雄氏編「中世和歌 資料と論考」平4明治書院）参照。

（3）どういう典籍が「正確な書写」の対象になつたかということについては、注（2）所掲拙稿で鎌倉中期頃まで事例を辿っている。

（4）注（2）所掲拙稿参照。

（5）なお、当該の陽明文庫本の筆者である近衛基熙の古典研究については、川崎佐知子氏「近衛基熙の書物交流」（和歌文学研究96、平20・6）など参照。

（6）川上新一郎氏「古今和歌集」版本諸版一覽」（斯道文庫論集18、昭57

・3。以下同誌34・35・36輯に増補）。

(7) 宮内庁書陵部蔵「古今伝受資料」(写27冊、150—736 書陵部目録増加50頁に一覧)。日下幸男氏「近世古今伝授史の研究 地下篇」(新典社、平10) 参照。また、大阪府立中之島図書館蔵「古今集諸抄」(写47冊、甲和279) も伝来に長雅が関わった古今注群と考えられている。西田正宏氏「松永貞徳と門流の学芸の研究」(汲古書院、平18) の135頁を参照。これらの注釈書群の内容については、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編「古今集注釈書伝本書目」(勉誠出版、平19) の「所蔵者別伝本一覧」を利用するのが便利。

(8) 「近世天皇と和歌—歌道入門制度の確立と「寄道祝」歌」(兼築信行氏・田淵句美子氏編「和歌を歴史から読む」笠間書院、平14所収) ほかの盛田帝子氏の論稿参照。

〔補記〕

国文研の調査収集と基幹研究に関わるシンポジウムということで、真っ先に思い付いたのが古今集奥書集成のデータであった。ただし本文中にも記した通り、この集成は歴代のRAの方々の手になるものであり、完結させて索引を作り上げられたのは小川氏である。自分の仕事であるかのように奥書集成データを素材に使ってあれこれ物を言うのは躊躇されたのだが、逆にこのデータにはこういう活用の道もあるのだということも申し上げたかったので、あえて利用させていただいた次第である。

シンポジウムの他の報告の内容と連関を付けるために、陽明文庫本を一つ取り上げ(↓久保木氏報告へ)、古典籍を正確に写し伝える具体的な営みに

も触れ(↓小林氏報告へ)、江戸時代における歌書のあり方にも言及する(↓神作氏報告へ)という形で報告した。本稿はほぼ当日の報告通りの内容だが、江戸時代の部分で説明が足りなかった部分を増補している。また、当日小高道子氏・日下幸男氏から御質問を賜った点につき、いくらか言葉を補っている部分があることをお断りする。

なお、当日は国文研の皆様のご厚意で、定家・頼阿・三条西実隆の書写奥書が連なっている古今集として初雁文庫の本を一本、また定家奥書が付したまま出版された古今集の例として、長谷章久コレクションの中の嘉永六年版(小本)三代集を展示していただいた。ご自身も報告者としてご多忙の中、ご尽力下さった久保木秀夫氏に感謝申し上げます。